

「レシタティブ」の語らないための技巧

著者	田村 理香
出版者	法政大学多摩論集編集委員会
雑誌名	法政大学多摩論集
巻	28
ページ	45-56
発行年	2012-03
URL	http://doi.org/10.15002/00008727

「レシタティブ」の語らないための技巧

田村理香

Toni Morrisonの唯一の短編“Recitatif”は、1983年に*Confirmation: An Anthology of African American Women*に発表された。アンソロジーを編纂したのが、ラディカルな表現活動で知られるアフリカ系アメリカ人夫妻Amiri Baraka (LeRoi Jones)とAmina Baraka (Sylvia Robinson)であることから明らかなように、「レシタティブ」は人種を強く意識した作品である。白人と黒人の二人の少女の出会いと再会が1950年代から1980年代初頭のニューヨーク州北部を舞台に語られている。モリスンは人種を通して大きなスケールで歴史や人間を描き出すことの多い作家だが、この作品は彼女の他の小説とはだいぶ趣を異にしている。二人の主人公の人種が最後まで明らかにされないのである。モリスンは次のように述べている——「人種に付与された、ときに悪意を含み、しばしば怠慢で、ほとんど常に予想通りの、揺るぐことのない足かせから言語を解放したいとずっと思ってきた。そのためにはどんなことをしたらいいのか、そうするための方法はどのように手に入れたらいいのか。……『レシタティブ』は実験だった。人種を異にする二人の登場人物にとって人種のアイデンティティは極めて重要なのだが、この二人からすべての人種的な記号を取り除いて語るという実験だった」(*Playing, xi*)。

アメリカを舞台にした小説において——少なくとも複数の人種が登場するアメリカ小説において——、人種を明確にせずに語ることはきわめて不自然である。人種はたんに生物学的な区別をあらわすものではない。人種を社会や歴史と切り離して考えることはできないし、とくにアメリカにおいては、社会や歴史によって人種が作り上げられたと言っても過言ではないだろう。それを考えれば、「レシタティブ」という「実験」にはとてつもない労力が求められたろうことは想像に難くない。困難どころか不可能にすら思えるそのような「実験」を、モリ

スンはどのように実現させたのだろうか。言語は人種というくびきから解放されたのだろうか。

モリソンは「レシタティブ」の二人の主人公から人種的な記号を取り除くためにさまざまな技巧を試みている。まず挙げなければならないのは、この作品を長編ではなく短編にしたことであろう。何をどう語るか、また何をどう語らないかは、長編であろうと短編であろうと、作者の自由である。しかし、その自由度は異なる。長編小説では長さも形式も制限されないが、それゆえ叙述に頼る傾向が高くなる。人種のような、人間を描くうえで重要な特徴を主要な登場人物について明かさずに語ることは長編小説では難しいだろう。それに比べて、短編小説では叙述に頼ることが少ない。力点はその分、プロットや語り方に置かれることになる。「レシタティブ」もそうした短編の特性を十分に活用している。

「レシタティブ」で二人の主人公の人種について触れられるのは、小説のごく初めの2回だけである。語り手トウィーラが、孤児院セント・ボニーでルームメイトになったロバータについて“a girl from a whole other race”（正反対の人種の少女）と述べるのと（243）、自分たち二人は孤児院の子どもたちが呼んでいたように人種を超えた“salt and pepper”（塩と胡椒のような白と黒）の仲良しになったというそれだけである（244）。そしてこれ以降、二人の人種について直接的に言及が行われることはない。こうした展開をごく自然なものとして読者に受け入れさせるために、モリソンはいくつかの工夫を凝らしている。その一つが反復とそれによる省略である。

「レシタティブ」では二人の主人公の出会いと再会がエピソードごとに5つのセクションに分けて語られており、どのセクションも一つの基本構造に沿って構成されている。すなわち、語り手のトウィーラがロバータに偶然に出会い、別れ、そしてまた出会う、というパターンである。読み進めるうちにそのことに気づいた読者は、次のセクションでも二人が再会することを予測するようになる。トウィーラの語りはこうした、起こるであろう読者の反応を踏まえて変化している⁹⁾。最初の再会では、語り手トウィーラが「彼女がいることに気づい」てから「ロバータ」と呼びかけるまで15行を要しているが（249）、次の再会の場面

では、「トウィーラ」と呼びかけられて「ロバータ！」と応えるまでに6行と短くなっている(251)。さらに次の再会の場面では「その列に並んでいたのはだれだろう……」の文章から2行足らずで、「ロバータは顔を上げるとわたしに気づき手を振った」と続いており、その女性がロバータであることを自明のこととしている(256)。最後のセクションにおいては“*There she was*”(彼女だった)のみで、ロバータという名前すらない(260)。このような省略ができるのは読者が承知している情報を繰り返す必要がないからであるが、主人公の二人の人種に関しても同様な省略の姿勢が貫かれている。

トウィーラの一人称の語りも人種的な記号を付与しないために大きく貢献している。一人称の語りでは、すべてが語り手の支配下にある。語り手は語りたことだけ語れるし、語りたくないことは語る必要がない。隠したい事実は隠せばいいし、隠し方も語り手次第である。「レシタティブ」の語り手トウィーラもこうした特権を駆使している。たとえば、ロバータとともにジミ・ヘンドリクスコンサートに行く若者二人が黒人なのか白人なのかについて、語り手トウィーラが述べることはない。強制バス通学のデモに関して、賛成派、反対派それぞれのデモ隊が別々の人種で構成されているのか、人種が混ざっているのかを明かしたりすることもない。明るく大らかで、大げさで主観的で、ユーモアに満ちたこの語り手はトールテールの語り手を髣髴とさせる²⁾。トウィーラは、自らを次のような人物であると述べている：“*We were eight years old and got F’s all the time. Me because I couldn’t remember what I read or what the teacher said.*”(244、下線は筆者)。8歳のときのことはあるが、記憶力や事実認識の弱さを読者に向かって堂々と宣言しているのである。ロバータがマギーのことを持ち出したときには動揺し、自分の記憶にいささか心もとない様子を見せる：“*Roberta had messed up my past somehow with that business about Maggie. I wouldn’t forget a thing like that. Would I?*”(255、下線は筆者)。トウィーラは世の中の動きにも疎い。デヴィッド・ロッジは、信頼できない語り手は「人間がいかに現実をゆがめたり隠したりする存在であるかを実演してみせる」と述べているが、「レシタティブ」の語り手は、彼女の自己申告に基づけば、頼りない語り手とでも名付けるべきだろうか(155)。作者モリスンは、二人の主人公の人種を明らかにしないために幾重にも技巧の防御壁を築いている

が、このような語り手に一人称で語らせていることもその一つである。万一整合がつかなくなった場合には、語り手に責任を帰することもできるのだ。

頼りなさをアピールする語り手トウィーラであるが、ひとたび二人の主人公の人種のこととなると、見事に変貌し、ときに読者を主人公たちの人種探しに駆り立て、翻弄する。読者は、トウィーラが提示する「ソルト・アンド・ペッパー」という呼び名によって二人が白人と黒人であることを明確な視覚イメージで与えられるのだが、それと同時に、“a girl from a whole other race”の“other”によって永遠に置き去りにもされる。一人称の語り手が、自ら二項対立の一項となり、自分がどちらの項に属するのかを明らかにしないまま、相手を「もう一方の」、「反対の」と呼んだら、二項のどちらをもアイデンティファイすることはできない。この呼び方は、黒人と白人が対立している、少なくとも融合していないという認識を前提に成立しているが、トウィーラはこうした対立項を使って、二人の主人公の人種への言及を巧妙に回避している³⁾。

そのための土台固めも万全である。二項対立を不自然にしないためには、トウィーラとロバータは常に一对の組み合わせとして認識される必要がある。片方だけが独立して登場することは避けなければならないし、それぞれの独自性についても二者間における相対的なものにとどめておかなければならない。「レシタティブ」では、トウィーラとロバータに直接かかわって小説を動かすような人物がほとんど登場せず、二人以外の人物は背景のような扱いを受けているが、それもこのような理由による。二人のそれぞれの生活が描写されたら、彼女たちの人種は明らかになってしまうだろう。その意味で、物語のベースとなっている最初のセクションでの主人公たちの扱いは重要である。ここでは、二人の大きな共通点と小さな相違点がことあるごとに強調され、二人を一对としてとらえるよう読者をうながしている：

“Almost all were real orphans with beautiful dead parents in the sky. We were the only ones dumped and the only ones with F’s in three classes including gyms. So we got along . . .” (245)

“We were eight years old and got F’s all the time. Me because I couldn’t

remember what I read or what the teacher said. And Roberta because she couldn't read at all and didn't even listen to the teacher.” (244)

“My mother danced all night and Roberta's was sick. That's why we were taken to St. Bonny's.” (243)

このような地道な方法によって「レシタティブ」の主人公たちはベアとして読者に認識されていくが、当時の社会事情を考えれば、黒人と白人が親しくなることは決して普通のことではない。1950年代のアメリカでは、多くの場合、人種は何にも先んじて考慮されるクライテリアだった。8歳のトウィーラも、孤児院セント・ボニーに入るときにはすでに大人の世界の差別的な人種観を母親を通して身に着けている：“And Mary, that's my mother, she was right. Every now and then she would stop dancing long enough to tell me something important and one of the things she said was that they never washed their hair and they smelled funny. Roberta sure did. Smell funny, I mean.” (243)⁴⁾ トウィーラは、ルームメイトとしてロバータを紹介された瞬間に、彼女が自分とは「正反対の人種」であるために「ムカツ」き、ロバータが臭うことを彼女の人種に帰している (243)⁵⁾。白人と黒人の少女が友情を育むことは当時の社会では普通には考えられない。それが可能になるのは一般社会とは異なる価値観が支配する場においてである。「レシタティブ」のためにモリスンが選んだのは孤児院という場である。

どのような社会にも、その社会をその社会たらしめる価値観があるが、孤児院も例外ではない。外の世界では人種が最優先されたが、孤児院セント・ボニーでもっとも重視されたのは孤児であることである。セント・ボニーには黒人や白人、プエルトリコ人やネイティブアメリカン、コリア人の子どもたちまでいるが、彼女たちのほとんどには天国にやさしいおとうさんとおかあさんがいた。それに対して、トウィーラとロバータには現実に母親がいた——トウィーラの母親は踊ってばかりいて、ロバータの母親は精神を病んでいた。本物の孤児たちはだれ一人として——黒人も白人も——二人を仲間としては認めなかった。こうした経緯によって二人は親しくなっていくが、異人種同士の友情が誕生し

たのは、そこが孤児院という特殊な社会だったからである。

ここでトウィーラは、一般社会の絶対的な価値観が実は絶対ではないことを身をもって知らされ変わっていく。育児放棄した母親との惨めな生活からの解放と、人種に支配された世界からの解放が同時に起こり、二重の自由を象徴するセント・ボニーでの生活をトウィーラは謳歌し、いかにそこを気に入っていたか、いかにロバータと気が合ったかを繰り返し語っている。すでに述べたように、語り手トウィーラによる二人の主人公の人種への直接的な言及はセント・ボニーを出てからは一度もない。それは語り手トウィーラが意識的に回避しているというよりも、登場人物トウィーラが人種の足かせから解放されたためであろう。トウィーラとロバータはあたかもセント・ボニーという子宮で成長する二卵性双生児のようである：“We changed beds every night and for the whole four months we were there we never picked one out as our own permanent bed” (243)⁶。この文章には、人種を超えた二人の少女の姿が描かれていて象徴的であるとともに、「レシタティブ」の語りにおける二人の人種の交換可能性がほのめかされていて示唆的である。

「レシタティブ」では、二人の主人公たちが孤児から思春期の少女へ、妻や母へと変わっていく姿が時代の流れを透かして見えてくるようである。ただし、二人の主人公の人生は連続的に語られているわけではない。一番長い孤児院での生活も4ヶ月で、それを除けば、二人が会ったのは30年に渡る長い年月の中で数回にすぎない。それにもかかわらず連続性が感じられるのは、時系列的に語られるエピソードにその時々アメリカ社会を象徴するようなことがらが数多く盛り込まれているからである。こうした時代や社会に特有な記号は、いかにも黒人性や白人性を表象しているようで、主人公たちの人種を規定したい読者の好奇心をくすぐる⁷。たとえばジミ・ヘンドリクスという記号が「レシタティブ」において時代と人種を示唆していることは言うまでもない。しかしこれによって二人の主人公の人種が確定されることはない。この黒人ギタリストは、黒人にも白人にも付与されることが可能な記号だからである。黒人でありながら白人から圧倒的な支持を得た最初のアーティストであるヘンドリクスは、音楽だけでなく若者の文化やファッションにも大きな影響を与えた。もちろん黒

「レシタティブ」の語らないための技巧

人のファンも多く、ジャズ界の巨人マイルス・デイビスも彼をたいへん高く評価していた一人である。

「レシタティブ」のロバータが二人の若者と向かっていたのは、おそらく1967年6月のモンタレー・ポップ・フェスティバルであろう。ロバータはいかにもジミ・ヘンドリクススのファンといった様子である。淡い青色のホルターを着たロバータは「髪はとても大きくてワイルドで、顔も見えないほど」だし、イヤリングもブレスレットくらい大きい(249)。口紅や眉の化粧も濃くて、これに比べたら、孤児院にいたけばけばしいおねえさん孤児たちは「尼僧にしか見えない」(249)。そう語るトウィーラは、ジミ・ヘンドリクススがだれかを知らなかった。それがいかに当時のティーンエイジャーらしくないかは、ロバータが吸っていたタバコを咳き込み、二人の若者が目をむいて天井を見上げたという描写にもあらわれている。若者特有のあげさなジェスチャーであるにしても、彼らの反応から、若者であれば人種にかかわらずジミ・ヘンドリクスはマスト・アイテムであることがうかがわれる。ジミ・ヘンドリクスという記号は、「ダサイトウィーラ」、「イケてるロバータ」をあらわす記号とはなりうるが、人種の記号とはならない。

おそらく1979年と思われる主人公たちの再会においても、さまざまな記号が時代と人種を示唆して、二人の人種を確定したい読者の欲望を煽り立てる。このエピソードで前景化されているのは、人種ではなく階級である。トウィーラは消防士の夫と息子、夫の家族とともにロワーミドルクラスの幸せな生活を送っている。夫の一族が長く住む昔ながらの町は郊外化され、コンピュータ時代を象徴する企業IBMに勤める人たちも住むようになっていた。そうした裕福な人たちを対象に新しくできた高級スーパーマーケット、フード・エンポリウムにトウィーラは出かけるが、場違いな気分になり、クロンダイク・アイスクリームしか買う気になれない。この庶民的なアイスクリーム・バーは義理の父と息子の好物だ。そんな彼女に声をかけるのがロバータである。中国人のお抱え運転手、二人の召使、ダイヤモンドの指輪、おしゃれな白いドレス、高級住宅地の邸宅、ケネス・ノートンという夫の名前はみなロバータの経済的な豊かさの例として提示されている。IBMやフード・エンポリウム、クロンダイク・アイスクリームといった固有名詞も社会的な階層を推測させる。もしもこのエピソ

ードが公民権運動以前のことなら、二人の主人公の経済的な格差から人種を読み取ることも可能だったかもしれない。しかし、いまをときめく業界の成功者が白人に限られていた時代はすでに終わっている。ロバータの夫は白人かもしれないし黒人かもしれない。妻に先立たれた4人の子持ちである夫とロバータは異人種間結婚をした可能性もある。そうした可能性があることは、東洋人の運転手を見たトウィーラがロバータに「中国人と結婚したの？」と尋ねていることでほのめかされている (252)。

強制バス通学もまた時代を彩る記号であり、人種を示唆しつつ確定しない記号である。人種差別撤廃のために遠方の学校に子どもたちを通学させる強制バス通学は1970年代から80年代にかけて行われた。しかし遠く離れた学校への通学はさまざまな面で支障を生み、反対運動が各地で起こった。「レシタティブ」ではロバータが反対のピケを張り、息子が強制バス通学の対象になっているトウィーラは、それに対してとくに賛成でも反対でもなく、口論になったロバータに対抗するためにだけ——ロバータとコミュニケーションを図るためにだけ——、賛成のグループに加わる。ここでもまた、主人公たちの人種を確定することはできない。1954年のブラウン判決の前であったなら、このような強制バス通学は明らかに黒人が対象であっただろう。しかし、1970年代終わりの強制バス通学は人種差別的撤廃という目的のために行われており、人種にかかわらず子どもたちはこの政策の対象となった。

「レシタティブ」に満ち溢れている、時代に特有な社会や文化をあらわす記号は、公民権運動以前の時代ならば、明らかに人種を指し示す記号になっただろう⁸⁾。ジミ・ヘンドリクス以前の黒人ミュージシャンであればファン層は黒人に限られただろうし、強制バス通学は黒人にだけ付与される記号だったろう。差別撤退のためのバス通学のような、白人にも犠牲を強いる政策は公民権運動を経て初めて登場した。二人の主人公に黒人性や白人性を与えるかのように見える「レシタティブ」の記号は、彼女たちを人種のステレオタイプから自由にする記号であり、人種のステレオタイプに二人をあてはめようとする読者をあざ笑っているかのようでもある。

さらに加えれば、「レシタティブ」という作品は、この時代以降を舞台とすることもできなかつたろう。社会的、経済的なポジションと人種とはますます関

係が希薄になっており、黒人だけ、あるいは白人だけに付与される人種記号はますます少なくなっている。「人種に付与された……ゆるぎない足かせ」である人種記号をわざわざ取り払う必要が少なくなってきたのである（*Playing, xi.*）。また、今後も、たとえば21世紀を舞台として、このような小説が書かれることはおそろくないだろう。2008年には黒人の大統領が誕生し、アメリカ合衆国大統領ですらもはや白人の人種記号ではなくなっているのだから。

「レシタティブ」というテキストの中で作者モリスンは、あるときは直接的に、あるときは遠回しに人種をほのめかしては取り除いている。その中でもっとも重要な記号となっているのはマギーであろう。マギーは孤児院セント・ボニーの台所で働いていた、耳と口が不自由な内翻足の女性であるが、いくつかの点でメタファーとなっている。

再会したトウィーラとロバータはマギーが黒人であるか否かを巡って口論になるが、これは、ジュダ・ベネットが論じているように、「読者が二人の主人公の人種において行っている」ことである（214）。「レシタティブ」の主人公たちはマギーの人種を確定しようと躍起になっているが、「レシタティブ」の読者もそれに倣って主人公たちの人種を確定しようとしている。語り手トウィーラはマギーの脚がparentheses（括弧記号）の形をしていると表現しているが、マギーはまさに「レシタティブ」という物語の中に括弧で加えられた物語である。その意味で、この入れ子構造は「レシタティブ」という「実験」それ自体を浮き上がらせている。マギーはその象徴である。

マギーという記号は「レシタティブ」という物語に関しても積極的に読者に意識化を喚起する。マギーの人種の謎解きに翻弄される二人の主人公は、互いの記憶の相違に深いショックを受ける。それは、互いにとって互いが、子どものときの孤独やさびしさやおびえを共有する唯一の人間だったからである。二人が相手の記憶を認めようとせず、言い争い、罵り合いまでするのは、互いが互いにとって唯一無二の人間であるからである。また、そうであるはずなのに、相手が自分の記憶を共有してくれないからであり、自分も相手の記憶を共有することができないからである⁹⁾。聞くことができない、話すことができない、つまり他者とのコミュニケーションを取ることができないマギーは、互いに分かち合

うことができない二人の主人公のメタファーでもある。

やがて主人公の二人は、マギーの謎の答えの先にあるものが、彼女の人種を確定させることなく、子どもだった自分たちであることに気づいていく。二人が交互に心情を吐露していく様は、セント・ボニーでベッドを毎日交互に変えていた様子と二重写しになる。二人の気持ちが重なり合ったとき、二人はマギーの人種について考えることがもはやどうでもよくなっていることに気づく。このとき、読者も主人公たちの人種が「レシタティブ」という小説の表層部にかぶせられたものにすぎないことに気づく。ここにおいて「レシタティブ」という実験は、主人公の二人を人種のくびきから放ち、読者をも解き放つ。これは、ひとりぼっちでさびしくおびえた二人の少女の物語であり、そうした二人の友情や成長の物語であり、二人とその母親の物語でもある。たしかそれはトニ・モリスンという作家を象徴するテーマの一つであった。「レシタティブ」という実験は、実験を終了し物語となったのだ。

- 1) 読者とテキストの相互作用についてはヴォルフガング・イーザーを参照。
- 2) 「レシタティブ」は出会いと再会の単純な繰り返しによって成り立っている作品であるが、それが退屈でないばかりか、生き生きとしているのは、トウィーラの一人称の語りによるところが大きい。
- 3) 二項対立的な考え方と二項対立的な表現を持つ言語との関係は興味深い。西洋の言語には二項対立的な表現は数多くみられるが、日本語ではこうした表現を聞くことはほとんどない。この二項対立的な表現そのものが、黒人と白人といった人種の二項化を作り上げるおおもとなっていると考えることも不可能ではないだろう。
- 4) 子どもは周囲の大人たちを通して社会の規範を身に着けていく。南部を舞台としたウィリアム・フォークナーの短編「あの夕日」では、5歳のJasonが「ぼくは黒んぼじゃないよ」、「ジーザスは黒んぼだよ」、「ディルシーも黒んぼだよ」「ナンシー、おまえは黒んぼかい？」といったことばを頻繁に口にする。ジェイソンはのちに南部の典型的な人種差別主義者になるが、これも、ことばを通して子どもが世界観を形成していく一例といえよう。

- 5) 「臭い」は他者に対する嫌悪感をあらわす常套句である。「臭い」ということばは「異なる」ことを前景化するためにしばしば使われるが、実際の臭いとは無関係なことが多いことは、いじめにおいて「臭い」ことが「理由」として頻繁に挙げられることから明らかである。
- 6) トウィーラとロバータという名前の類似性も二人の交換可能性を示す。こうした二人の特異性は、これらがよくある名前でないという点にも読み取ることができる。
- 7) 批評家たちも主人公たちの人種を確定したいという欲望に駆られている。たとえばエリザベス・エイベル参照。
- 8) 舞台ということを考えれば、ニューヨーク州の郊外という地域も重要である。南部であれば、1980年代になっても黒人と白人が交流することはまだ珍しかった。この時代の南部についてはピート・ダニエルを参照。
- 9) カルメン・ギレスピーが指摘するように、モリスンの作品には経験を感情とともに共有する登場人物たちが登場するが、そうした経験における知覚の相違によってしばしば彼らは深く傷つけられている (162)。

【引用文献】

- Abel, Elizabeth. "Black Writing, White Reading: Race and the Politics of Feminist Interpretation." *Female Subjects in Black and White: Race, Psychoanalysis, Feminism*. Ed. Abel, Barbara Christian, and Helen Moglen. Berkeley: U of California P, 1997, 102-31.
- Bennett, Juda. "Toni Morrison and the Burden of the Passing Narrative," *African American Review*. 35 no.2 (Summer, 2001): 205-217.
- Cross, Charles R. *Room Full of Mirrors: A Biography of Jimi Hendrix*. New York: Hyperion, 2005.
- Daniel, Pete. *Lost Revolution: The South in the 1950s*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2000.
- Faulkner, William. "That Evening Sun," *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage International, 1995. 289-309.
- Gillespie, Carmen. *Critical Companion to Toni Morrison: A Literary Reference to*

Her Life and Work. New York: Facts on File, 2008.

Iser, Wolfgang *The Act of Reading: A Theory of Aesthetic Response*, The Johns Hopkins UP, 1978.

Keil, Charles. *Urban Blues*. Chicago: U of Chicago P, 1966

Lodge, David. *The Art of Fiction*. New York: Penguin Books, 1992

Miles Davis, Quincy Troupe. *Miles: The Autobiography*. London: Picador, 1990

Morrison, Toni. “Recitatif,” *Confirmation: An Anthology of African American Women*, Ed. Amiri Baraka and Amina Baraka. New York: Morrow, 1983

_____. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. New York: Vintage Books, 1993